



冷  
夕  
イ  
雨

hikali



音だけが、私には届いていなかった。

匂いも、冷気も、その容赦のない意味も、伝わってきていたのに。

私はゆっくりと立ち上がり、曇った窓ガラスを拭いた。

冷タイ雨。

いつのまにか、雪は雨に変わっていた。

カチリという音を立ててコタツのヒーターがオンになる。私はその無機質のサーモが感じ取った冷気を背に感じて、密かにその冷気を楽しんだ。

母がテレビの内容に控えめの笑い声を上げた。弟が電話口に立って、先程からの会話を続けている。

私は綺麗に白いスジを取り除いたミカンを一房、口にする。

突然のようにミカンの香りが私を包み込み、私の意識を支配していた雨の匂いにじんわりと溶けた。

私は、幼いころに父に連れられて行ったプロ野球のデイゲームを思い出した。

ビールの匂い。トランペットの騒がしい音色。リズムを作りだしながら一斉に揺れるくすんだ青のマスコットバット。誰もがエースのピッチングに沸いていた。立派な口髭を生やした助っ人バッターの登場にさらに沸いた。その中で食べた冷凍ミカン。奇妙な熱気を吸い込んで気持ちがいいほど冷たかった。助っ人バッターがフォアボールを選んでから弟は冷凍蜜柑を口にした。弟は大袈裟なくらいの嬌声をあげた。

その時の果汁を含んだ小さなつぶつぶ、一つ一つの独立した氷の結晶のシャリシャリが私の口の中で蘇る。

舌で押さえつけるとキュウと悲鳴を上げながら溶けた。

自分でもおかしいと思える位気分が昂っている。私はむずむずと沸き上がってくる奇妙な喜びで身体を震わせる。二月は嫌いな月ではなかった。私は、人は自分の生まれ月を好きになると紅潮した顔で言っていた先輩の顔を思い出した。

しかし、雪。そう思い出して私は少々後悔した。私は雪が嫌いだった。外はまだ一面の白である。雨が溶かすにはまだ時間が掛かる。

ふと、父の言葉が浮かんだ。

『ユキコ、父さんも雪は嫌いだ』

由起子。私の名前だ。幼稚園児のころ、灰色の空から舞い降りるボタン雪が幼い私には黒い蛾の大群に見えたものだった。その事を何とは無しに言うと父が答えたのだ。父は雪国の出身であった。お前は雪の本当の恐さを知らない。おさなごころにそう脅かされた。

外は暖冬続きの最近には珍しい、まとまった量の積雪である。

もう一房を口に入れる。入れるとまた香りが広がった。

私は静かに待つことにした。



バンッ

激しく金属板が何かに叩きつけられる音がした。居間にいた全員が白い縁取りをされた玄関のドアを思い付いた。

「何かしら」

母が呟き、立ち上がる。キイキイと泣く、蝶番の悲鳴がドアを挟んだ私の耳まで届く。

「大変」

玄関を覗き込んだ母がそう言った。ズルリと玄関の敷物が板の間の上で滑る音が、遮るものが無くなって聞こえるようになった。

「救急車！ユッコでも、誰でもいいから、早く！」

母が、顔面蒼白の声でそう叫んだ。弟が訳が分からないまま、受話器を下ろし、また持ち上げて百十九番をした。

玄関まで行くと父が真っ白な顔に脂汗を浮かべて苦しそうに呻いていた。グレイのコートがぐっしょりと濡れていて、完全に中まで染み込んでいるようであった。早く脱がした方がいいと私は直観的に感じた。母は完全に気が動転していた。

水滴で曇ったサイレンの音が閑静だった住宅街に響きわたり、私の家の前まで来て止まった。ヘルメットを被った救急隊員が入ってきて、一見で重病人に見える父を見下ろした。隊員は、すぐに濡れた衣服を剥ぎ取り、清潔な毛布を掛けた。

(また)

私はそう思った。

寂しい救急車のサイレンが、意地が悪いと思えてしまえるほど暗い病院の廊下に響きわたった。また、救急車が出ていく。赤い消火栓表示のランプが、もう一つの光源である緑の非常口表示の蛍光灯の光の中で不気味に光っていた。恐らく数えきれないほどの死者の心を吸い込んで、ランプは暗い補色関係を見せている。

ガチャリと病室の扉を開くと、母と弟が座ったまま眠っていた。隠し切れない疲れの色を、その忙しない、戦場の兵士のような恰好の中に滲ませていた。

私はゆっくりと父に近づき、その乾いた唇に触れる。大量のアルコールに水分を吸い取られた父の唇は紫に変色していた。ミイラを見るような気がした。痛ましかった。涙が出るほど痛ましかった。

父はアルコールに吞まれていた。微かなモルトの香りが私の鼻孔をくすぐった。ここ数日の父は誰の目から見ても異常であった。仕事には行く。恐ろしいほどの勤勉さで朝食中に書類に目を通し、夜遅くになってアルコールにまみれて帰ってくる。そして、呆気なく父は倒れた。

『肺炎と気管支炎を併発しています』

若い医者がそう言った。父は喘息持ちである。医者は父に注射をし、白い電動の吸入機の前に父を座らせ、気管支拡張剤を吸入させた。すぐに咳き込み、高価そうな機械の前で吐き出す父を少しだけ嫌そうな顔で見ている。薄黄色い、痰とアルコールの破片を含んだ胃液がクリーム色のリノリウムの床の上に吐き出された。母は泣いた。

今は点滴をされて、一見静かそうに眠っている。体力勝負だと医者は言っていた。

体力勝負。

誰の目から見ても父の分は悪かった。アルコールが恐ろしい迄に父を蝕んでいる。加えて連日のハードワークと冷たい雨が、残酷に思えるほど痩せこけた父から体力を削り取っているはずであった。

絶望。

脳裏に言葉が浮かんだ。

涙が出た。

胸が熱くなって、喉がつかえた。私は何度もむせた。辛かった。

堪らなくなって、私は外へ走り出た。冷たい雨が私を迎えた。アスファルトに残った雪がグチョグチョと悲鳴を上げていた。長くない髪がすぐに濡れた。肩が冷たくなった。呼気に残っていたミカンの匂いが私を雨に溶かしていく。ゆっくりと私は雨に浸食される。

じんわりと溶けながら私は父を思った。

十年前、雪が降った。都内のマンションの煉瓦ブロック敷きの道の上に、僅かに積もったのを、私は微笑ましいほど、はしゃいでかき分けた。たった数センチが嬉しかった。私が振る返ると父が微笑んでいた。

次に思い浮かんだのは吹雪の中だった。強風でリフトが止まったスキー場の中、蛍光オレンジのポンチョを広げて、スキーが僅かに斜面を登るのに私は夢中になっていた。ガラス張りの向こう側の父が私を見ていた。私は両手を上げて大きく振った。父も小さく返した。隣で母が父の親馬鹿を呆れて見ていた。弟が寒いと言って、父のいるカフェに戻って行った。父の持つコーヒーの湯気がやけに旨そうに見えた。

次第に私はエスカレーターして行った。

国立大学に入学すると、私は迷わず山岳部に入部した。日本中の山に登り、年二回の海外登山にも参加した。登山の度に増えていく、安くはない登山道具に、母は母にしては控えめに抗議をした。

父は、山に魅せられた私をかばってくれた。悪いことじゃあ無い、そう言ってくれた。

ふと我に返ると、冷たい雨が私を呑み込もうとしていた。

不思議と寒くはなかった。全身が雨に包まれ、感覚が麻痺しかけていた。

身体の中に冷たい雨が落ちてくる。

……オト、うさん

私は呟いた。

私は父の元に戻った。

病室には、母も弟もいなかった。

清潔だけが取り柄のシンプルな病院パジャマから伸びた腕の静脈に刺さった点滴の針が痛ましかった。父は静かな寝息を立てていた。

灯っていない蛍光灯の端っこに小さな蛾が止まっていた。パタパタと静かに羽ばたいた。雨で濡れた窓から庭の常夜灯の白い光がぼんやりと差し込んでいる。父の顔にくっきりと陰影が見える。僅かに頬がこけている気がした。

歩いて、私は窓を開いた。

部屋の暖気がゆっくりと外へ流れていく。しばらくして流れが止まり、冷タサが部屋へと伝わってきた。暖気が冷気に変わっていく。

気がつくのと、音が聞こえはじめていた。冷タイ雨の音。ザアザアとポツリポツリの間のような静かな音だった。やっと聞こえたとは私は奇妙なほど静かな気分だった。窓の外は溶けかけた残雪が常夜灯の光を反射していて、やけに眩しかった。私は前髪の先から滴る雫を見つめていた。

音が私の中に浸食してくる。それだけ雨に溶けれる気がした。

私はポケットからミカンを取り出す。ゆっくりとその皮を剥くと冷タイ香りが私を取り囲んだ。ミカンは真夏の冷凍みかんの様に冷たかった。

一房を摘んだ。

摘んで、近づく。冷タイ雨の音が、私の心の音に重なる。

そして、それを父の口へ……、

……

ユッコ、

呟いた。

声が部屋に響く。手が止まった。静かに瞼が開く。

全ての記憶の根底。そこにある銀縁メガネの奥の瞳が私を見つめる。

ぼたりと、私の顎から雫が滴った。

私が病室から出ると、また、母が泣いていた。その隣に弟が座り、左手に持ったコーヒーをぼんやりと見つめていた。

「さっきさあ、」

何とは無しに弟が口を開く。

「さっき、ユッコ姉ちゃんのこと呼んだよね」

母が静かに頷き、バッグからハンカチを取り出す。弟は独り言の様に呟く。

「大学から連絡があつてさ。……搜索は春になってからだって。」

母がゆっくりと頷く。

「雪が溶けてからなんだって。」

瞬間。

私は自分が雪を嫌いになった理由を思い出した。

初めて雪を重いと感じた瞬間の記憶。凄まじい危機感と絶対的な絶望感を全く隠さない先輩の、悲鳴としか言いようのない叫び声が脳裏で反響し、それにも勝る、莫大な質量感を感じさせる大音響が、私、そして地を震わせていた。

振り返ると全視界を覆い尽くす真っ黒い雪。

記憶はそこで切れていた。

私の全身が冷タサで震え始め、容赦の無い冷タイ雨の大音量が私の全身を包み込んでいく。

「父さんは死なないよ。姉ちゃんが見守っているから」

母が何度も頷く。弟の声が奇妙な確信を持って、響いていた。

私は堪らなくなって外へ駆け出た。

すぐに、全てを取り巻いた黒い雪が私を押し潰し、私が厚さを失っていく。

雪が冷タイ雨に変わり、私を溶かしていく。

「蜜柑の匂いがするね」

弟がそう言った気がした。

私は泣いているのだろうか。

それとも、これは冷タイ雨なのだろう……ウカ。

〈了〉